

二〇二五年度 洛星中学校入学試験 (国語) 【後期日程】

※ 問題は冊子形式で、全部で26ページあります。

※ 解答用紙は問題冊子の中にはさんであります。

※ 解答は欄らんをはみ出して書いてはいけません。

【一】 次の文章は、『詩歌の待ち伏せ1』（北村 薫 著）の「四、『じ』松田豊子」の全文です。よく読んで、後の問いに答えなさい。

1

かなり前のことです。書店で、文庫本の『外国ジョーク集』を手に取り、ぱらぱらと見たら、こういうのが載っていました。夕闇迫る頃、はりねずみの子が迷子になり、サボテンの温室に迷い込む。あちらに触れ、こちらに触れ、「ママなの、ママなの？」

その顔が見えるようです。何て可愛いんだろう、と、思いました。当然、買ったのですが、今、とっさには見つからず、失礼ながら、出典を示すことが出来ません。けれど、これを目にした時、思わず頬が緩んだことだけは、はっきり覚えています。

なぜ「可愛い」のか。当のはりねずみくんは、「冗談じゃないよ」というでしょう。そうです、冷静に考えるなら、彼が置かれているのは、微笑んだり出来ない①悲劇的状況なのです。しかし、わたし達の内には、これを読んで「可愛い」という感情が湧き起ります。――念のため、娘二人に試してみたところ、共に、にこっとして「可愛い」といいました。

たまたま手元にあった『新明解国語辞典 第二版』を見ると、「可愛い」とは《自分より弱い立場にある者に対して保護の手を伸べ、望ましい状態に持って行ってやりたい感じ》となっている。なるほど、これならびたりです。惻隠の情は誰にでもある。「ママはこっちにいるよ」と、連れて行ってあげたくありません。

ところが、納得しかけて、また考えてしまいます。――実はこれは、理性が働き助けたくなる以前に、もう「可愛い」のですね。格別、こちらが保護する必要のない場合、例えばママがすぐ後ろにいるのに、やっていたとしても、同じ気持ちが起こるでしょう。いや、心配せずにすむ分、こちらの方が、「可愛い」という感情を、より楽しめそうです。「後ろにいるよ」と、すぐに教えず、あどけない姿を、ちよっと見ていたくなります。勿論、はりねずみくんがパニックに陥っているなら話は別ですが、だとしたら、もう「可愛い」などという気持ちは起こらないでしょう。

当人にとって望ましくない状態に目を細めているのですから、②これは《定義》とは、いささかずれる。

「可愛い」といえば、しいのもといまろ椎本才磨に《猫の子に嗅れてゐるや蝸牛》かたつむりという句があります。これも読む者に、そういう気持ちを引き起こさせる。同感していただけたと思います。

そこでアンケートを取ったとします。「可愛い」のは《猫の子》なのか、それとも《蝸牛》か。ほとんど全員が前者と答えるでしょう。

流れとして、視線は《蝸牛》に収束して行きます。そこが焦点となる。季語も《猫》の春ではなく、《蝸牛》の夏です。しかし、読み終えた時、読者の眼というカメラは必然的にぐっと引かれ、再び《猫の子》の方を向いてしまう——と思うのです。生まれて初めて見た不思議な物体に初々しい関心を示す彼の、ひくひくする小さな鼻が見えるようです。ところで、この場合、ピッチに陥っているのは、勿論、後者です。そうすると、《定義》はどうなるのでしょうか。

いや、そうではない、と、また引つ繰り返すことも出来ます。イメージ的には、猫クンの方は《幼き者》であり、蝸牛氏の方は我が道をすでに歩いている《大人》です。だから、我々は《猫の子》の像に、意識するしないにかかわらず、ほのかな懐旧の情を抱き、手を差し伸べてやりたくなるのだ、と。

理屈は、このように色々つけられます。しかし、③この場合、思考は足の遅いランナーです。《はりねずみクン》や《猫クン》を見た瞬間にやって来る微笑みに、追いつくことはできません。

2

ここでわたしは、(1) せんふう旋風のように襲った笑いのことを思い出します。《はりねずみクン》や《猫クン》より少しだけ大きな子供の詩を読んでいた時のことです。

『少年少女つづり方作文全集』(滑川道夫編・東京創元社)の第十巻は、『ぼくの詩わたしの詩』。明治大正昭和三代の膨大な資料を元にして編まれた、児童詩のアンソロジーです。

そこで、こういう作品に出会いました。

「じ」

松田豊子

京都・竹田小四年

おとうさんは

「じ」だった

せんそうに行かれなかった

でも

せんそういけなかってよかった

ばくだんで

家のとんだ人

おとうさんに死にわかれた人

しょういだんでやけ死んだ人

おとうさんは

「じ」でよかった

「じ」でよかった

不謹慎ふきんしんだと思おもいながら、この最後のリフレーンで吹き出ふしてしまったのです。笑わらいは、ほとんど暴力的に、わたしを捕とらえたのです。そして、この詩の力は、まさにそこにあると思うのです。

これについても、子供達に見せてみました。二人とも吹き出しました。《「じ」でよかった》の部分については、

「④うーん、まったく、そうなんだけどねえ」

と、いいながら、しかし笑っていました。

さて、『理屈』を述べてみましょう。まず、『国語大辞典』（小学館）では《名語記―二（前略）ぢは痔とかけり。寺をしたがへたる字をば、おほくぢとよめる也》とありますが、これは勿論、旧仮名の語。金閣寺には《きんかくじ》とルビを振ります。

『屋号・商標100選 CIのルーツをさぐる』（島武史・日本工業新聞社）という本を読んでいたら、明治屋は《創業時より一貫して“meidiya”を使用しているが、これは創立者の磯野計が、明治の「治」は「ぢ」であるから、da・di・du・de・doのdiが正しいという意見から“meidiya”と綴ったのがその起源である》と、書かれていました。高校の古典入門の時に明治屋の商品を持って行くと、生きた教材になるでしょう。それはさておき、正規の現代語では、無論「じ」です。現代人には、広告のおかげで《ぢ》という表記が浸透しています。かえって新仮名に抵抗があるかと思うので、一言申し添えておきます。

さて、わたしは、⑤こういう素材は苦手です。どうも、この単語は口にしにくい。しかし、人がそういう感情を持つということと自体が、ここでは肝心なのです。そしてまた、『小四年』という年齢も、いうまでもなく作品のうちです。

わたしは、子供の感覚というのは大人が見る以上に、（2）したたかなものだと思います。作者は、はっきり意識はしなかったでしょう。しかし、本能的に《今の自分の年なら、これを書いても大丈夫、（3）あざとくならない》という直感があったような気がします。それは、決して嫌らしいことではない。むしろ、人間らしいことだと思います。無論、まったく無心に書いたものでもないのです。どちらにしても、⑥並んだ言葉は力を持っています。

病気にユーモラスなものなどありません。これが、つらく、苦しいものであるのは勿論です。ただ、普通は詩として、友達に、町の人に、全国に発表したりはしないことです。それが堂々と歌われる。そのことにより、読むものは吹き出しつつも、笑いと引き換えに《よかった》という響きを、強く受け止めます。これは忘れられない。

わたしは、これを読みながら、同時に笑いとは無縁のところまで亡くなったり、生き残ったりした多くの《おとうさん》、戦争

の時代を生きた《おとうさん》達を思い、子供達を思わずにはいられませんでした。

問一

本文8行目に傍線部①「悲劇的狀況」とありますが、これは「はりねずみの子」にとってどういう状況を表していますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 夕方に温室を歩き回る孤独な姿が、かえっておかしく見えてしまう切なく痛ましい状況。

イ. 夕暮れ時に母親とはぐれ、温室内を必死に探しても見つからないという哀れで不幸な状況。

ウ. 母親が見つからないまま夜が近づき、温室内が静けさに包まれつつあるひっそりとした状況。

エ. とても可愛いために、かえって読者に注目されることになってしまったという意に反した状況。

問二

本文18行目に傍線部②「これは《定義》とは、いささかずれる」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 母親に見守られているはりねずみの子のあどけなさを愛でしてしまうことは、理性の働きとは正反対であるということ。

イ. パニック状態のはりねずみの子を可愛くないと感じることは、保護してあげたいという感情とはやや食い違ふということ。

ウ. はりねずみの子にとって望ましくない状態を可愛いと思うことは、あわれみの気持ちとは少し違っているということ。

エ. かよわいはりねずみの子に対して守ってあげたいと心が動くことは、心配の必要がないこととはかなり次元が異なるということ。

問三

本文 30 行目に傍線部③「この場合、思考は足の遅いランナーです」とありますが、どういことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. どんなに論理的な理屈であつても、次に起こる感情を予測することはできないということ。
イ. 複雑な感情の場合、正しい理屈を導き出すには時間をかける必要があるということ。
ウ. 感情を説明しようとする理屈は、必ず感情がわき起こった後に考え出されるということ。
エ. 複数の理屈を考えつくことで、初めて感情のしくみを理解することができるということ。

問四

波線部(1)「旋風のように」(33行目)、(2)「したたかな」(71行目)、(3)「あざとく」(72行目)の文中における意味として最も適当なものをそれぞれ次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|------------|-----------------------------|-----------------------------|----------|---------------------------|
| (1) 旋風のように | ア. 盛大に | イ. 一時 <small>いっとき</small> | ウ. くり返し | エ. 突然 <small>とつぜん</small> |
| (2) したたかな | ア. てごわい | イ. するどい | ウ. まちがない | エ. すばらしい |
| (3) あざとく | ア. 悪口 <small>あくぐち</small> に | イ. ずる賢 <small>がしこ</small> く | ウ. いやみに | エ. つたなく |

問五

本文 59 行目に傍線部④「うーん、まったく、そうなんだけどねえ」とありますが、「子供達」がこの発言で表現したい内容はどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 詩の作者の父の病気のおかげで、本に載るほど優れた詩が生まれたことが「よかった」のは間違いないが、下品なイメージがついた「じ」という言葉を使うことにはためらいがあること。
- イ. 病気のおかげで、詩の作者の父が徴兵されずにすんだことが「よかった」のは反対できないが、恥ずかしさを覚えずに堂々と「じ」と記すことについては決まり悪さを覚えること。
- ウ. 病気のおかげで、詩の作者の父が生きて戦争を乗り越えたことが「よかった」のは正しいが、「じ」を繰り返す言うことで父の名誉を傷つけることは避けた方がよいと怒りを感じることに。
- エ. 詩の作者の父が病気であつたおかげで、家族が離れずにすんだことが「よかった」のはうなずけるが、他の戦死した人々を軽んじるような最後の連の内容については不謹慎だと思ふこと。

問六

本文 69 行目に傍線部⑤「こういう素材は苦手です」とありますが、筆者が苦手なものとは何ですか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 辛いことだと思ふ一方でおかしさを感じてしまうもの。
- イ. 楽しい笑いと悲しみの涙が代わる代わるやってくるもの。
- ウ. 愛と憎しみの両方がぎっしりとつまっているもの。
- エ. 明るい無邪気さの裏に暗い悪意が隠れているもの。

問七

本文74行目に傍線部⑥「並んだ言葉は力を持っています」とありますが、筆者は詩についてどのような考えを持っていますと考えられますか。適当なものを次のア～カの中から2つ選んで、記号で答えなさい（順不同）。

- ア. 作者が意図したかどうかにかかわらず、言葉の組み合わせは時に読む人に強い印象を与えうる。
- イ. 作者が前もって想定していない、偶然生まれた言葉の効果にのみ作品の面白さがつまっている。
- ウ. 作品がもたらす感情の裏には必ずしくみや理屈があるため、それを解読する作業が求められる。
- エ. はっきりわかる主題とは別に、その周りへ思いを巡らせる余白が読み手に残されることがある。
- オ. 人間の感情は理屈で説明しにくい、作品では言葉の組み合わせによって全ての感情を表せる。
- カ. 作者の性別や個人情報、作品に書かれていなくてもその読み方に大きな影響を与えている。

【二】

次の俳句①～⑤について、傍線部のカタカナの季語を漢字に直しなさい。

- ① フウセン消ゆ 空の渚に こえのこし
- ② ツユの今日 田植えて みどり深くする
- ③ ヒヤムギに 氷残りて 鳴りにけり
- ④ 左右の手の クサブエの音を 吹き分けぬ
- ⑤ セツブンや 鬼もくすしも 草の戸に

【三】 次の文章は、『トモルの海』（戸部 寧子 作）という小説の一部です。よく読んで、後の問いに答えなさい。

本文までのあらすじ

野球好きの小学五年生「トモル」は、この夏休みを、生まれてから一度も行ったことのない母方のおばあちゃんの家で過ごすことにした。おばあちゃんの家近くにある公園で野球の守備練習に励んでいた「トモル」は、中学生ぐらいの女の子「めぐる」に出会う。どうどうとして少しえらそうな「めぐる」は、それ以降も「トモル」の前にふと現れ、さまざまな会話を交わしたり、いっしょにお寺にでかけたりするようになった。おばあちゃんの家に来てから二週間が経った頃、「トモル」が応援しているチームの甲子園準々決勝進出が決まった。いっしょにその試合を見ようと、「トモル」は「めぐる」を家に誘う。

① ほんとうに、あとちよつとだったんだ。ほんとうに。

初回で先制されたけど、三回でしっかり同点に追いついて、七回で逆転の一点追加。

守備もいつもどおり、いや、いつも以上にさえわたっていた。

セカンドからショート、ショートからファーストへのあざやかな送球。

左中間に落ちていくボールをセンターがダイビングキャッチしたときなんて、おれは立ちあがって、観客といっしょに「うおー」とさげんだ。

だいじようぶ。勝てる。そう思いながら、こぶしを強くにぎった。

一点のリードを、守って守って、守りぬいて、むかえた最終回。

九回ウラ、ツーアウト、走者一塁。

相手チームの打者は、バットの真芯でボールを捕らえた。

そのかあんという音は、今までになんども聞いたはずで、心が晴れるように気持ちのいい音。選手も、観客も、みんな顔をあげる。

②なのに、おれは思わず、耳をふさいでしまった。

外野手が、走る。走って、走って、追いかける。

だけど、どんなに必死に走っても、腕^{うで}をちぎれるほどのぼしても、決して届かない。

青い空を切りさくような、美しく、ようしやのない白球。

海色のユニフォームは、汗^{あせ}とどろと涙^{なみだ}にぬれながら、甲子園を去^あっていった。

ちりと風鈴^{ふうりん}が鳴る。

おれは完全に気がぬけて、こうしてAセミのぬけがら^ぬみたいのに、たたみの上で寝^ねつころがつている。自分でも、「なんでそこまで？」ってふしぎに思う。

実は、おれの体のどこかには、うきわとかラムネのびんについている栓^{せん}みたいな部分があつて、そこを「すぽん」ってだれかに外されたのかもしれない。そのせいで、今まで体のなかにあつた、わくわくとかどきどきとかしゅわしゅわのエネルギーが、ぜんぶ出ていっちゃった。

すると、またあのやさしい風が、ふわっと吹^ふいてきた。

おれはふりむかなかつた。でも、めぐるちゃんが、すぐ後ろに來たことを感じた。

「もう、だからあんまり思入れを強くするなつていったじゃん」

めぐるちゃんは大きなため息をついた。

「あんたが試合して負けたんじゃないんだから」

おれはめぐるちゃんに背を向けたまま、「ちがうよ、負けたからくやしいとかじゃなくて」と、ぼそぼそつぶやいた。

「やっと返事をしたわね。じゃあ、なんなのよ」

「わかんない」

「なんじゃそら。そんなら、考えなさい」

めぐるちゃんは、きびしい。鬼だ。それでもおれは、うう、うう、とうなりながら、自分の心のなかから、どうにかこうにか言葉をしぼりだした。

「みんなさ」

「うん」

「どの高校もみんな、一回しか負けてないんだあつて」

③めぐるちゃんは、ああ、と小さな声をもらした。

あんなにたくさんのチームが参加して、予選から数えたら三千を超えていて、だれも負ける気なんかなくて、でも、優勝するところ以外は、みんな、ぜったいに一回負けるんだ。

「そういう歌がね、流れてたんだ。まえに、おばあちゃんがつけてたラジオで」

「へえ」

「そのときはね、昔っぽい曲だなあとか、すごい歌詞だなあつて思っただけだったんだけど。でも、今日の試合見ててさ」

「うん」

「やっとわかった。一回だけけど、その一回で、夏が終わっちゃうんだ。もう、その先には、進めないんだ」

おれは、言葉に出すまで、自分がそんなふうに考えていたことを知らなかった。

めぐるちゃんは、しばらくだまつたままだった。おれは、もしかしてめぐるちゃんがもう帰ってしまったんじゃないかと心配になり、ふりむきかけた。

「その一回に」

めぐるちゃんの声が、さざ波のようにひびく。

「その一回にどんな意味があるのか、それを知っているのは、その一回を経験した人だけなんだよ」

そして、めぐるちゃんの手が、おれの頭をなでる。それは白い光のようにまぶしくて、おれの視界はぼんやりとかすんだ。感^{かん}触^{しよく}

らしい感触がなくて、夢を見ているみたいだ。ただ、風がふわりと肌をかすめていく、そんなかすかな気配だけがただよう。「もうこれでおしまい、なのか、次こそは、なのか。悔いはないのか、心残りなのか。悲しいのか、解きはなされたのか。その人が経験したその一回に、ほかのだれかが意味をつけることなんて、できない」めぐるちゃんは、おれの頭をなでつづけた。ひんやりとした、うすいてのひら。風邪を引いたあの夜、おれのひたいにふれた、あの手。

「なんだって、たった一回。一回きりだよ、トモル」

めぐるちゃんは、いつになく小さな声で、だけどはつきりと、いいきった。

「これ以上ないってくらいに幸せな時間も、やりなおせたらって思う瞬間も、ぜんぶ、ぜんぶ、一回きり。もう一回って、どんなに強く願っても、ぜったいに、取りもどせない。ぜんぶぜんぶ、一回きりなの」

おれは、そんなのあんまりだって、思った。

一回きりなんて、いじわるだ。

いやだ、けちだ、あんまりだ。

④目の奥が、熱くなる。涙が、満ち潮みたいにくれあがってくる。めぐるちゃんが頭をなでた瞬間に、それはほろんとこぼれた。

中略部分のあらすじ

転がったままにいる「トモル」に、「めぐる」はさらに声をかける。たった一回のできごとが悲しくて苦しかったら、気がすむまで転がって、思い出してもいいかなと思ったら思い出したらいい。違う景色が見えるかもしれないと――。「トモル」が起き上がると、もう「めぐる」はいなくなっていた。翌日、お父さんとお母さんが迎えにやってきた。お母さんがおばあちゃんの家に帰るのは、「トモル」が生まれるよりもずっと前に引越して以来、初めてだ。門をくぐったお母さんは飛び石を一つ一つふみしめて家に近づき、ふうつと息をついた後、家に入った。

お母さんはすわらずに、部屋の天井てんじょうをぐるりと見まわして、庭のほうに顔を向けて、そしておれのほうを見た。

「お寺のほうにお参りに行きたいんだけど、トモルもつきあってくれる？」

おれはいきおいこんでうなずいた。あんまり強くうなずいたから、頭がくらくらした。お母さんはそんなおれの様子を見て、ようやく笑った。

お寺の階段は、朝露あさつゆにしっとりぬれている。おれとお母さんとはなりにならんで、⑤一段一段を、やつぱりふみしめるようにして、のぼっていく。お母さんの手にかかえられた花束には、赤やピンクがたくさんまじっていて、あったかい感じがした。

「ねえ、お母さんが子どものころに使ってた部屋って、どこ？」

「二階よ。お母さんのつっていても、今はおばあちゃんがほとんどお昼寝に使ってるっていつてたけどね。おじいちゃんとおばあちゃんの部屋も、二階にあるの。まだあがったことなかった？」

「うん。あとで行ってみてもいい？」

「いいよ」

それから、お母さんは「お父さんと結婚けっこんして、最初のころはね、おばあちゃんの家で暮らしていたの」と続けた。

「おばあちゃんから、もう聞いている？」

「うん。おれ、ぜんぜん知らなかったから、びっくりしちやった」

「そっか、そうよね」

石段をのぼりきったところで、おれが「まず本堂であいさつするんでしょ」というと、お母さんは目を丸くして、「まあ、おとなみたいね」と笑った。

本堂でお参りすると、お母さんは本堂をまわりこみ、奥のほうに進んでいった。ここから先は、はじめて行く場所だ、と思ったけれど、そうじゃなかった。

砂利道じやりみちを、ふたりならんで歩いていく。

道の脇^{わき}には、太い幹を持った大木。根元はぐねぐねとうねっていて、上のほうの葉は、てのひらのように広がっている。丸く整えられた低い木も、ぽこぽこ生えている。縁日^{えんいち}の夜は、おそろしいおぼけや動物に見えたけど、今はみんな、やさしくおれたちを見守ってくれている気がする。

このまま歩いていけば、あの夜、おれが迷いこんでしまった場所に行きつくはずだ。

「トモル」

⑥お母さんの声がぼつりと落ちてきて、おれは顔をあげた。

「トモルが生まれてきたのは、十一年前です」

「え、あ、うん」

「長男で、ひとりっ子です」

「え、なにになに？ それくらい、知ってるよ」

知っている、といいつつ、おれの胸はどきんどきんと、外側にもれてしまいそうなくらい大きく打たれていた。お母さんは「そ
うだよね」と笑う。

「でもね、十五年前、トモルが生まれてくるまえにもね、お母さんのおなかのなかには、赤ちゃんがいたの」

「えっ」

思いがけない言葉だった。でも、ふしぎとその事実が、おれの胸にすとおさまった。

ああ、そうか。

お母さんは、話そうとしている。あの日、おれがおばあちゃんの家に行きたいっていったとき、少しだけひらいた口から出てこなかった言葉を、ちゃんとかたちにしようとしているんだ。

「その子が、はじめての赤ちゃん」

お母さんは、どこか遠くを見ている。その大きな黒い目が、水面のようにゆれている。

「それがわかったときは、あんまりうれしくて、ほんとうに？　ほんとうに？　って、なんでもおなかをさすったわ。待ちに待った、赤ちゃん。お父さんは仏壇の前ですつと泣きじやくっておじいちゃんに話しかけているし、おばあちゃんはお祝いだって、食べきれないくらいたくさんのお料理を作っちゃって。ふたりとも、わたしよりまいあがっているんだもの。でも、うれしかった。うん、幸せだった」

お母さんの顔には、おだやかな笑みが浮かんでいる。その表情をとおして、おれは、みんながよるこんでいる姿を想像する。「この子はすごいなあって、思った。ただ、そこにいるだけで、ただ、おなかをけるだけで、わたしたちを笑顔にしてくれた。ずいぶん元気に動きまわる子だから、運動が得意かも、とか、女の子ってわかってからは、かわいいベッドや洋服を用意したり、どんな名前にしようかって考えたり。たくさん、候補があったの。毎日、毎日、おなかをなでて、声をかけるたびに、いとおしさで、胸がいっぱいになった。でも」

お母さんはふつと口をつぐみ、足を止めた。ざりつと、くつが砂利をこする音がした。本堂の横は、もう通りすぎてしまっていた。

⑦おれは、お母さんの手をぎゅつとにぎった。すると、お母さんは、はつとしたようにおれを見て、それからふわりとほほえんだ。海の底のように、とても静かな目だった。そしてふたたび、歩きだす。言葉を、ついでいく。

「生まれてくる予定日の、二か月前にね。赤ちゃんの心臓が、急に、動かなくなってしまったの」

お母さんの手は、あたたかかった。熱いぐらいだった。だけどそれは、おれの手の熱のせいだったのかもしれない。

「ほんとうに、突然のことだった。あともう少しで会えるねって、まえの日だって、元気に動いていたの。だから、なんでも、うそだ、うそだ、って。だってあんなに元気だったんだから、元気に生まれてきてくれるに決まってるって、だから、そんなのありえない、まちがっているって、そう思ったけど、でも、心音は見つからなかった。なんどおなかをなでて、声をかけても、赤ちゃんはわたしのおなかを、もうけつてはくれなかった」

そう話すお母さんは、おれが知っているお母さんとは、ちがう人ようだった。自分では、どうすることもできないことを前

にして、悲しみに暮れている、女の人。

「あの子が生まれてくることは、わたしのなかでは、あたりまえのことで、夢とか、想像とか、未来とか、そういう遠いところにあるものじゃなくて、もうほとんど、現実になっていたの。手をのばせば、すぐにでも、ふれられる、つかむことができるはずの、現実。それが、一瞬で消えさってしまつて、どうしたつて、取りもどせなくつて、なにがなんだかもう、もうね、わからなかった」

お母さんは、ふうつと息をつく。ひと言ひと言、自分の心と食いちがつてしまわないように、おれに、きちんと伝わるように、言葉をしぼりだしていく。

「赤ちゃんの葬儀そうぎと供養くようを終えて、ああ、赤ちゃん、ほんとうに、手の届かないところに行っちゃったんだつて、泣いて、泣いて、涙をぜんぶしぼりだしたあとはもう、動けなくなった。なんにも考えたくないし、話したくないつて、Bただぬけがらただぬけがらに転がつていたんだ。そんなわたしの様子を見て、お父さんとおばあちゃんが、ここじゃない、別の場所で暮らしたらどうかつて、空気を入れ替えようつていつてくれて。だから、おばあちゃんの家を出て、今の町に移り住んだの。お父さんもおばあちゃんも、つらかったのね。あのころのわたしは、自分の悲しみにつきつきりで、ほかにはなんにも考えられなかった」

ぬけがらみたいに転がるお母さんを、おれは見たことがなかった。お母さんは、おれの前ではいつだつて、お母さんだった。だけど、そんなお母さんの栓を、すぽんと引きぬいて、ぬけがらにしてしまう、そんな悲しいできごとが、そんなに遠くはない昔、たしかに、あったんだ。

「それから、一日、一日が過ぎていつて、少しずつだけど、新しい空気とか、まわりのみんなの言葉とか、おいしいごはんとか、体のなかに入ってくるようになって。でも、やつぱり、なんでここにあの子がいらないんだろうつて、そういう思いがわきあがるたびに、悲しみとか、むなしさとかがあふれかえつて、目の前がふさがつて、まっ暗になつて、わたし、一生苦しいままなんだつて、そう思っていたの」

ふいに、お母さんは、おれの手をきゅつとにぎりかえした。

「だけど、トモルが来てくれたね」

おれは、お母さんの顔を見あげる。お母さんは、ほほえみながら、おれのことを見つめている。

「お母さんの胸をずっとしめつけていた、こわさとか、不安とか、苦しさとか、そういうものをぜんぶ、吹きとばすくらいの大
声で、生まれたばかりのトモルは泣いていたんだ。あったかい光がともって、だいじょうぶだよ、だいじょうぶだよって、お母
さんの世界を、トモルがやさしく、明るく照らしてくれて、その光のなかで、わたしは、安心できた。そのときにね、あの子の
笑顔が見えた気がしたの。元気に、幸せそうに笑う、あの子の笑顔。わたしには、こんなにかわいい、大切な子どもがふたりい
るんだって、ようやく、わかったの」

からからから、と風車かざぐるまの音がする。

⑧お母さんはまた、足を止める。今度は、意志をもって。

「それでも、もう一度ここにもどってくるまで、こんなに時間がかかってしまったね」

お母さんは、そうつぶやいて、まっすぐに前を向く。

そこには、お地藏さまがいた。

あの夜にはよく見えなかった、お地藏さまのやさしい顔。お地藏さまは、子どもの味方なんだよ、という、めぐるちゃんの声
がよみがえる。

風を受けて、風車がくるくると回る。色とりどりの、風車。

「ずっと、ここにもどってきたかった。いつかトモルにも、あの子のことを話してあげたいって思っていたの。だけどね、いざ
もどろうとすると、足がすくんでしまった。こわくなったの。あの子が、この現実にはいないんだってことを、わたしはほん
とに受けとめられているのかなって。頭では、わかっているつもりなのに。でもね、あの子とトモルが、いっしょに遊んで、笑
いあって、大きくなっていくところを、やっぱり見たかったっていうのも、ほんとう。それは、どんなに時がたっても、変わら
ないの。だからね、ここへもどってきたとき、頭ではわかっていたはずの現実に、わたしの心はちゃんとついていけるのになっ

て、それがこわくて、足がすくんでしまったんだ。いくじなしだね」

おれは、そんなことない、と首をふった。お地藏さまのそばには、小さなかawaiiいお地藏さまが何人もならんでいた。赤やピンク、水色のよだれかけをかけている。

「やつと、来られた。トモルのおかげだよ」

どちらからともなく、おれとお母さんは手をはなした。

お母さんは、大きなお地藏さまのすぐ右どなりにいる小さなお地藏さまの前にしゃがんで、「おそくなつて、ごめんね、めぐるちゃん」といった。その小さなお地藏さまは、㊦おちやめな、いたずらっぽい笑みを浮かべている。

⑨それを見て、おれは、ああ、と思う。

めぐるちゃんは、いないんだ。

いるけど、でも、いないんだ、ほんとうは。

あんなに、いっしょに話したのに。

あんなに、楽しかったのに。

あんなにも、めぐるちゃんは、めぐるちゃんだったのに。

めぐるちゃんが、いつていたとおりだ。

現実、強い。強くて、ようしやがない。

めぐるちゃんに生きていてほしかったと、おれがどんなに抵抗しても、お母さんたちがどんなに願っても、現実、ぴくりとも動かない。変わらない。

そんなの、あんまりだ。

あんまりだよ、めぐるちゃん。

でも。

だけど、だけど。

——想像や夢が、現実を追いぬく瞬間だってあるわ。

おれは小さく口をひらいて、その言葉をごくんと飲みこんだ。胸のあたりがじんわりあたたまって、ふしぎと力がわいてくる。おれは、「お母さん」と呼びかけた。

「うん？」

「おれ、めぐるちゃんと会った」

そのとき、ふわりとやさしい風が吹いてきて、風車は気持ちよさそうに、くるくると回った。

おれを見つめるお母さんの黒目が、すうっと透きとおっていく。今、気づいた。めぐるちゃんの目は、お母さんの目に、そっくりなんだ。

「めぐるちゃん、すっごい元気だったよ」

それからおれはしゃがみこんで、お地藏さまを見つめた。だけど、今おれの目に浮かんでいるのは、おれが知っている、めぐるちゃんの姿だった。

「ちよつといばってるし、すぐこづいてくるし、けっこういじわるだし、⑩そっけないときのほうが多いんだけどね」

仁王立ちする、めぐるちゃん。おれの頭をこづく、めぐるちゃん。わざと捕りにくいボールを投げってくる、めぐるちゃん。おれの先をいつもずんずん歩いていく、めぐるちゃん。

「でも、なんだかんだ、やさしいところもあってさ、かっこいいんだ」

それでさ、めぐるちゃんが笑うとね、なんでもできそうな気がしてくる。この世のなにかもに、勝てそうな気がしてくる。めぐるちゃんって、そういう笑いかたをするんだよ、お母さん。

そういったとき、めぐるちゃんが、笑った気がした。

あの、向かうところ敵なしって感じの、⑤不敵な笑み。無敵の笑み。

ぼん。

うすいてのひらが、つむじのあたりにふれる。

めぐるちゃんが、「きれい」といつていたおれのつむじを、その手が、やさしく、やさしく、なでてくれる。ぼん、ぼん、ぼん。

めぐるちゃんは、いない。

だけど、いたんだ。

めぐるちゃんは、たしかに、いた。

夜の境内けいだいにも。

昼下がりの公園にも。

朝日に照らされたお寺の階段にも。

おばあちゃんの家の縁側にも。

そして、おれの夢のなかにも。

それは、まぎれもなくほんとうなんだ。

たった一回の夏。

めぐるちゃんと過ごした、たった一回の、この夏。

それはどんな現実よりも、色あざやかで、楽しくて、これだって、確信できるほどの、ほんとう。

「トモル」

おれは、うつむいている。だから、お母さんの表情は見えない。

「⑩ありがとう、トモル」

ぱたぱたと落ちたものが、地面をしめらせていく。この世でいちばんやさしくて、あたたかい雨が、降っている。

問一 二重傍線部⑥「おちやめな」(180行目)、⑦「そっけない」(206行目)、⑧「不敵な」(213行目)の文中における意味とし

て最も適当なものをそれぞれア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

⑥ おちやめな

ア. 無邪気むじやきで子どもっぽい

イ. はかなくかわい

ウ. かわいらしく賢かしこそう

エ. あどけなくて不思議な

⑦ そっけない

ア. 乱暴やさで優しく

イ. 愛想あいそがない

ウ. 周りに関心がない

エ. 心がせまい

⑧ 不敵ふてくな

ア. えらそう

イ. 迫力はくりよくがある

ウ. 思いあがつている

エ. 何事もおそれない

問二

本文1行目に傍線部①「ほんとうに、あとちよつとだったんだ。ほんとうに。」とありますが、ここに見られる表現の特徴とくちゆうを説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 「ほんとうに」、「あとちよつとだったんだ。」「ほんとうに。」を短い言葉で区切ることで、言葉にリズムを持たせて、トモルの興奮している様子を表している。

イ. すべての表現がひらがなで表記されており、小さい子どもが言っているような書き方をするすることで、トモルの精神が幼いことを暗示している。

ウ. 「ほんとうに」という表現が繰り返されることによって、言葉には表しきれないくらい悔くやしい気持ちが強調されている。

エ. あえてカギカッコ（「」）を使わないことで、悲しい気持ちを声にならないくらい小さな声でつぶやいている様子を表そうとしている。

問三

本文13行目に傍線部②「なのに、おれは思わず、耳をふさいでしまった」とありますが、「トモル」はどうして思わず耳をふさいでしまったのですか。「なのに」が表す意味もふまえて説明しなさい。

問四

本文38行目に傍線部③「めぐるちゃんは、ああ、と小さな声をもらした」とありますが、このときの「めぐる」の説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. いつまでも言葉を選んで黙^{だま}っていたトモルがやっと話し始めたので、早く先を話させようと、うながしている。
- イ. 子どもっぽく勝ち負けを気にしていると思っていたトモルが急に大人びたことを話し始めたので、あやしんでいる。
- ウ. トモルがひいきのチームを応援するあまり、たった一試合の重みに圧倒^{あつどう}されていると知り、とまどっている。
- エ. トモルが実際の負けにこだわっているのではなく、負けることの意味を考え始めているのだと知り、驚^{おどろ}いている。

問五

本文65行目に傍線部④「目の奥が、熱くなる。涙が、満ち潮みたいにくれあがってくる」とありますが、このときの「トモル」の説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. すべてのことが一度きりであることへの悲しみと、その事実を受け入れがたい気持ちが徐々に^{じょじょ}にくらみ、抑えきれなくなつた感情が涙としてあふれそうになっている。
- イ. めぐるの言葉の裏にある優しさを感じ取ったことではりつめていた気がゆるみ、応援していたチームが負けた悔しさや悲しみが一気にあふれ出そうになっている。
- ウ. 勝利を逃^{のが}した選手たちをふがいなく思う気持ちと、応援していたチームの試合をもう見られない寂^{さび}しさで胸がいつぱいになり、言葉にできない思いが涙となつてこみ上げている。
- エ. めぐるにわかりきったことを繰り返し諭^{さと}されたことで、悔しさや無力感がより強く感じられ、試合に負けた現実の重さと相まって涙が止まらなくなっている。

問六

本文78行目に傍線部⑤「一段一段を、やっぱりふみしめるようにして、のぼっていく」とありますが、ここから「お母さん」のどのような様子が読み取れますか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. ずっと気になっていた場所へ今まきに行くにあたり、とうとうこのときがきたと覚悟を決めて歩いている。
- イ. いつか行きたいと思っていた場所へ行くにあたり、今の気持ちを忘れないように味わいながら歩いている。
- ウ. 行きたくなくて今まで避けていた場所へ向かうにあたり、逃げ出した^にい気持ちにとまどいながら歩いている。
- エ. 考えてはいながらしていなかったことを実行するにあたり、抑えきれない興奮を発散しつつ歩いている。

問七

本文99行目に傍線部⑥「お母さんの声がぼつりと落ちてきて」とありますが、この場面の説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. お母さんが急に落ち着いて話し出し、普段とは違う様子を見せたことに、トモルは警戒心を抱いている。
- イ. お母さんが心細げにトモルに呼びかけ、たどたどしく話し始める様子に、トモルは不安を抱いている。
- ウ. お母さんが言葉を選びながら話し出した、その改まった口調と態度に、トモルはお母さんとの距離を感じている。
- エ. お母さんが静かにトモルに呼びかけ、話を切り出そうとする様子に、トモルは唐突なものを感じている。

問八

本文125行目に傍線部⑦「おれは、お母さんの手をぎゅつとにぎった。すると、お母さんは、はっとしたようにおれを見て、それからふわりとほえんだ」とありますが、ここでの「お母さん」と「トモル」の気持ちのやりとりの様子を説明しなさい。

問九

本文142行目の破線部Bで、「お母さん」は「ただぬけがらみたいに転がって」います。「トモル」も本文19行目の破線部Aで「セミのぬけがらみたいに、たたみの上で寝ころがって」います。この「ぬけがら」という比喩^{ひよ}表現によって、二人のどのような様子が読み取れますか。それぞれの状況もふまえて説明しなさい。

問十 本文162行目に傍線部⑧「お母さんはまた、足を止める。今度は、意志をもって」とありますが、これはどういうことで

すか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. さつきは赤ちゃんをなくした喪失感から抜け出せずにおびえてばかりだったが、今はトモルとともに積極的に様々な
ことに取り組みたいと思うようになったということ。

イ. さつきは過去と向き合うのに苦しんだが、トモルの幼い頃を思い出すうちに楽しい気分になり、今は死んだ赤ちゃん
に向き合って生きたいと思っているということ。

ウ. さつきは過去を思い出し、その苦しみにとらわれてしまったが、今はトモルの存在にも支えられて赤ちゃんの死とい
う現実にはちゃんと向き合おうと決意しているということ。

エ. さつきは赤ちゃんを失った過去と向き合ううちに我を失ってしまったが、トモルに励まされて、今は死んだ赤ちゃん
のお墓をお参りしたい気分になったということ。

問十一 本文181行目に傍線部⑨「それを見て、おれは、ああ、と思う」とありますが、これはどういうことを思ったのですか。
説明しなさい。

問十二 本文232行目に傍線部⑩「ありがとう、トモル」とありますが、「お母さん」はなぜ「トモル」に「ありがとう」と言っ
たのでしょうか。あなたの考えを書きなさい。

解答用紙（国語）

【一】

問一

問二

問三

問四

(1)

(2)

(3)

問五

問六

問七

【二】

①	
②	
③	
④	
⑤	

【三】

問一

㊦				
㊧				
㊨				

問二

--

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

問七

--

問八

--

問九

--

問十

--

問十一

--

問十二

--

受験番号
氏名

※評点